

「ハハハ、さああくだった人〜2013〜」

ニシオカ・ト・ニール

松坂が、柴田に店内掃除の仕方やグラスの置き場所などを教えている。

柴田は筆記用具片手に懸命に聞いている。

松坂「ピンクの布巾がカウンター用で、青が食器用。で、グラスはこの白い布巾ね。

オッケー？」

柴田「オッケー」

松坂「ピンクが？」

柴田「食器？」

松坂「じゃなくて」

柴田「あ、カウンターね」

松坂「そう」

柴田「で、食器が青」

松坂「そう」

柴田「ピンクがカウンター、青が食器、ピンクがカウンター、青が食器（とメモは取らず反復して頭に叩き込む）よし、覚えた」

松坂「じゃ、とりあえずカウンター拭いて」

柴田「オッケー。…えーっと」

松坂「ピンクな、ピンク」

柴田「ピンク」

松坂「つていうかさ、メモ取れよ」

柴田「え？」

松坂「さつきからノートとペンを後生大事に持つてるけどさ、一切開かねえのな」

柴田「これネタ帳だから…あんまり余計なこと書きたくないっていうか」

松坂「（ため息）…やっぱいいや。別にいらないし、バイト」

柴田「はあ？さつき雇ってくれて言ったじゃん！」

松坂「無理だもん、お前。ネタ探したいなら働かなくていいからカウンターで飲んでろよ。

その方が助かるわ」

柴田「えっ」

松坂「正直全然儲かつてないのね、うち。だから、この店でネタ収集する代わりに、売り上げ貢献する。それでいいこう」

柴田「無理。お金ないもん」

松坂「なんだよ全く、33にもなつて金が無い金が無いって。とにかくお前には無理だからこういう仕事」

柴田「大丈夫だつて。一応やつてたしね、こういうバイト」

松坂「いつだよ」

柴田「してたじゃん！学生の時」

松坂「してたっけ？」

柴田「してたじゃーん！（どんぶりに御飯を持って牛丼を出す仕草）」

松坂「松屋だろ、それ」

柴田「うん」

松坂「うんじゃねえよ！松屋と一緒にするなよ！」

柴田「でも、カウンターに立つだけの簡単なお仕事でしょ」

松坂「簡単じゃない！一人で来る常連さんの相手とかしなきゃいけないし、

会話の内容によっては、スツと聞かないようにしてなきゃいけないし」

柴田「…」

松坂「自信無くなっちゃってるじゃん」

柴田「…大丈夫。できる！」

柴田、自分を奮い立たせ、息巻いて、せつせとカウンターを拭き始める。

松坂「本当に大丈夫かよ」

柴田「大丈夫だつて、しつこいなあ」

松坂「いや、この仕事もだけど、そのケータイ小説？もさあ」

柴田「どういう意味？」

松坂「お前が『大人の恋愛小説』なんて向いてないと思うよ」

柴田「はあ？」

松坂「だつて、これは俺のイメージだけど、大人の恋愛小説って『失樂園』とか『セカンドバージン』とかそういうの？」

柴田「まあ、そうだね」

松坂「いやいやいやいや(無理だろ)」

柴田「うっさいよ！だからここでネタ収集させてっていつてるんですよ」

松坂「つまり何にもネタがないから来てるってことだろ」

柴田「うぬぬぬ。それ以上言うな。このケータイ小説で一発バキッと当てても、

このお店でお金使ってやんないぞ」

松坂「今のところバキッと当たるとは到底思えないけどな」

柴田「もう。アンタまでナベツネみたいなこと言わないでよ」

松坂「ナベツネ？」

柴田「編集の人」

松坂「編集の人ナベツネって言うの？ハンプバねえな」

柴田「そんな権力ないけどね、こっちのナベツネは」

松坂「あそ」

柴田「超失礼な男なの。『柴田さんにケータイ小説の話がありまして…テーマが

大人の恋愛なんですけど…柴田さん絶対に興味ないですよね』だつてさ」

松坂「低姿勢で丁寧な言い方じゃないの」

柴田「低姿勢、風ね。『どうせお前には無理だろけど』って言いたんだよ。

でもこれ最大のチャンスだと思ってるから。今まで私の渾身の作品をろくに読みも

しないで没にしてきたあいつに、『え！柴田さん、こんな恋愛小説も書けるんですね

ギャフン！』って言わせてやるんだから！言わせてやるんだから！！！！(興奮)」

松坂「落ち着けて。で、そのなんだっけ？プロ？」

柴田「プロット。要はあらすじね。」

松坂「それを提出する締め切りが？」

柴田「明後日」

松坂「無理だろ」

柴田「ぬあー！」

松坂「何だよいきなり」

柴田「今の一言で現実に引き戻された」

松坂「現実を見るよ」

柴田「どうしよう…。どうしよう…」

松坂「いきなり弱気になっちゃったよ。さつきまでの強気なお前はどこへ行った」

柴田「現実に取り戻されると同時に、私が纏っていた強気という名の鎧

は脱げて消え去りました」

松坂「魔界村みたいだな」

柴田「いや、でもダメ！絶対ダメ！ダメ、絶対！！」

松坂「お前テンションのこれ(手で波のジェスチャーして)凄いな」

柴田「松坂！いや、松坂！」

松坂「何だよ」

柴田「負けたくない、私負けたくないの！もう、これでコケたら私終わりだよ。実家に強制

送還されるんだ。それで宇宙人みたいなおっさんと無理矢理お見合いさせられて、結

婚させられて、宇宙人似のすっぱーブツサイクな女の子産んで、つまない人生送ら

なきゃいけないよ…それだけは勘弁！マジ勘弁！」

松坂「柴田、妄想が過ぎるよ」

柴田「私、このチャンスを逃したくないの。どうしても小説家になりたいの！たかがケータイ

小説でも、これは大事な第一歩なんだよー」

松坂「柴田…」

柴田「だから松坂お願い！私を助けてください！力を貸してください！お願いします！」

柴田、松坂の手を握り、健気に懇願。

松坂「わかったよ…。俺も、向いてないなんて言っただけ悪かったよ。お前のそういう必死で健気

で頑張り屋さんみたいな姿？嫌いじゃないんだよな…なんつって…」

柴田の携帯に電話がかかってくる。

松坂「それにお前の夢に対する執着、本当はちよつと羨ましくもあったんだ。ほら、俺、絵

描きになりたいって夢があったけどあつさり諦めた…か…」

柴田電話を取る。

柴田「はい、もしもし」

松坂「聞けや」

柴田「(松坂に)しっ！ナベツネ！」

松坂「！」

柴田「…はい…え？書いてますけど…まあ、8割くらいですかね。はい、結構大人の恋愛得意なんで。ネタのストックもいっぱいあるんで。筆が乗っちゃって。え？今ですか？」
の電話で？…あ、ちよつと今気分転換で外に出ているんで、後にしてもらえます？…
はい、はい…」

松坂「お前何流暢に嘘ついてんだよ」

柴田「だって、口頭でいいからざっくり内容教えてくれて言うからさ」

松坂「だからって大口叩く必要ないだろ、何が『筆が乗っちゃって』だよ」

柴田「こうなったら、ここの客の恋愛事情に全てがかかっているからね。ネタになる客が

来なかったら、あんたも私も終わりだよ」

松坂「俺は関係ないけどな」

柴田「とにかく、ネタ収集しながら売り上げに貢献するから！」

松坂「お前にそんなことできるのか？」

柴田「出来る。絶対する、絶対するから」

松坂「絶対だぞ？契約成立だからな？」

そこへ、麻美入ってくる。

麻美「こんばんは〜！」

松坂「お！いらつしやい」

麻美「また来ちゃった」

松坂「二日連続、ありがとうございます」

麻美「今日はあんまり長居できませんけど〜」

松坂「え？そうなの？」

麻美「うん。会社の子と飲むんだけど、その子残業になっちゃって」

松坂「あらそう」

麻美「だから(その子が)来るまでね」

松坂「来たら一緒に飲んでいけばいいじゃん」

麻美「ダメ〜。今日は女子会だから」

松坂「うちは女子会大歓迎なんだけど」

麻美「女の子だけの秘密の相談があるのっ」

麻美、柴田を気にする。

柴田、そわそわしている。

松坂「柴田、何やってんの？」

柴田「いや、いきなりのお客様で、心の準備的なものが…」

松坂「は？」

麻美「新人さん？」

松坂「あ、そうそう」

麻美「はじめまして、麻美です」

柴田「あ、あ、はじめまして、柴田です。(もじもじ)」

松坂「ごめん。こいつ緊張してるみたいで。柴田。柴田倫鈴(しばたりん)」

麻美「えーりんちゃん？かわいい！名前！」

柴田「…」

松坂「でしょ、名前だけかわいいんだよね」

麻美「やだ、そんなこと言ってないですよ。え？いくつ？」

柴田「…33です」

麻美「えー！じゃあ私の8個上？うそお〜ごめんなさい、年上なのにタメ口利いちやった！

え？年下だと思ってた〜。え？超若くないですか？って超肌綺麗〜

柴田「はあ、そうっすか」

麻美「え？綺麗ですよ〜。お肌〜」

柴田「はあ、ありがとうございます〜ございます」

麻美「あは！ウケる！超クール」

柴田「…」

松坂「…ね？ウケるよね〜？仲良くしてやって。(柴田に)売り上げ！」

柴田「わ、わかってるよ」

麻美「二人仲いい〜。ウケる〜」

麻美、ケラケラ笑った後で、ウケるウケるゝと薄く言いながら、
油取り紙とか使い出すとか携帯を触りだす。

麻美「新人さんが入るなんて全然知らなかった。え？普通に募集してたんですか？」

松坂「いや、大学時代の同級生で、金が無いっていうから仕方なく、みたいな」

麻美「へえゝそうなんだ」

松坂「そうだ。麻美ちゃん、ちよつと協力してくれる？」

麻美「え？何ですか？」

松坂「柴田のロープレをしよう」

柴田「ロープレ？」

松坂「そ。ロールプレイング。麻美ちゃんにも参加してもらつて柴田の接客訓練をします」

柴田「え！いい、いいよそんなの」

麻美「超面白そう！え？やりましょうよ！」

柴田「いやあ…」

松坂「はい、まずお客さんが来たら？二気に挨拶」

柴田「…いらつしやいませ」

松坂「そしておしぼりを渡す」

柴田「(おしぼりを渡しながら)どぞ」

麻美「ありがとうございますっ♪」

松坂「お飲み物を伺う」

柴田「お、お飲み物は何にいたしますか？」

麻美「レッドアイ(何でもいいです)くださいっ☆」

柴田「…はい？」

松坂「はい？つて何だよ」

柴田「いや良くわからなかったから」

松坂「レッドアイだよ、レッドアイ」

柴田「はあ」

松坂「かしこまりました」

柴田「かしこまりました」

松坂「で、ドリンクを作ると。わかったか？」

柴田「わかてるよ、大体。やっぱ松屋と一緒にじゃん」

松坂「全然ちげーよ」

麻美「松屋とか、超ウケるんですけど！やっぱり柴田さん超面白い！え？柴田さん血液型何型ですか？」

柴田「ABです」

麻美「ぼー…超AB（ぼー）」

柴田「…」

麻美「あれ？私なんか変なこと言いました？」

松坂「ううん全然全然！！ごめんねいつ初日だから緊張してるんだわ」

麻美「全然全然！むしろ最初のお客が私なんかでごめんなさい、みたいな？」

柴田「…」

松坂「あ、ドリンク、すぐ作るから」

麻美「全然全然ゆつくりでいいです。つてか、マジで仲良いんですね、二人」

松坂「腐れ縁なだけだけどね」

麻美「腐れ縁かあ。いいなあ。こんなかつこいい松坂さんと腐れ縁とか超羨ましい」

柴田「…」

麻美「…」

柴田「…」

松坂「…あ！」

麻美「？」

松坂「あの、全然話変わるんだけどさ」

麻美「？」

松坂「新しい彼氏はいつ連れてくるの？」

麻美「え？何ですか突然」

松坂「俺、昨日の話聞いてから、超会いたいんだよね、彼氏に」

麻美「やだ〜」

松坂「いまマジで。あの話聞いたら、会いたくなるって普通」

麻美「そうかなあ、そこまでも無いと思うけど」

松坂「（柴田に）麻美ちゃんの彼氏、凄いだよ。ね？」

柴田「え？」

松坂「お、柴田も興味持っちゃったみたい」

麻美「やだ、柴田さんってば！」

松坂「教えてあげて、柴田にも」

麻美「え〜」

松坂「聞きたいよな、柴田」

柴田「はい…」

麻美「じゃあ言っちゃうけど〜。私の彼氏〜」

松坂「はい〜」

麻美「何と〜」

松坂「はい〜」

麻美「何とお〜」

松坂「はい〜」

柴田「…」

麻美「やだ、何か溜め過ぎて逆に言いにくなっちゃった〜」

松坂「大丈夫だから、言つてあげて」

麻美「じゃあ普通に言いますけど。私の彼氏、ムカイオサム君なんです」

松坂「よっ！」

柴田「…へ？」

麻美「…」

松坂「へじゃねえよ！あ、ビックリしすぎて、逆に、そのパターンか」

麻美「やだ！あは！柴田さんウケる！」

柴田「…」

麻美「ごめんなさい驚かせちゃつて。今の彼、向井さんと同姓同名の、

普通のサラリーマンなんです」

柴田「ああ」

麻美「ま、顔は向井理っていうよりウォンバットに似てるんですけど、それはそれで

超可愛くないですか？」

松坂「かわいい、超かわいいじゃん、ウォンバット。ますます会ってみてえ」

麻美「珍しいですね。松坂さんがそこまで私の彼氏に興味持ってくれるのって。」

松坂「そうかな？」

麻美「そうですね、いつも『会ってみたい』とか言わないし」

松坂「だって、会ってみたいでしょ。ウオンバット…じゃなくて向井理。なあ、

柴田も会ってみたいよなあ！」

麻美の携帯が、鳴る。

麻美「おっと、ごめんなさい。もう仕事終わったのかな。もしもし？」

え？マジで？その近くで一杯だけ飲んで…じゃあ迎えに行くわ…」

麻美、電話しながら、外へ。

松坂「おい柴田！人がせつかく色々パスを出しているのに何やってんだお前は！」

柴田「無理！」

松坂「？」

柴田「無理。私あの人怖い！」

松坂「は？別に怖くはないだろ」

柴田「怖いよ。なんであんなに矢継ぎ早に話しかけてくるの？何でいちいち私の言うことに

『あは！超ウケる！』って言うてくんの。AB型っぽいとか意味わかんない。私本当はA型だし」

松坂「嘘つくくなよ。てか、お前もつと頑張れよ、俺だって無理矢理彼氏の話とか

振ってるんだから」

柴田「だって…」

松坂「だってクソもねえよ！」

柴田「しょうがないでしょ、私人見知りだからこういうの時間かかるんだよ！」

松坂「はい出た。人見知り」

柴田「何？」

松坂「便利な言葉だよな。人見知りって」

柴田「？」

松坂「貴様、人見知りと言う言葉で自分を正当化するのか」

柴田「そんなんじゃない！」

松坂「誰だって人見知りなんだよ？知らない人の所に行ったり、知らない人と話したりす

るのは、気を使うし、疲れるんだよ？」

柴田「…」

松坂『人見知り』なんて頑張らないヤツの言い訳だ」

柴田「…」

松坂「チャンスなんだろう？それをろくに努力もしないで、「人見知りだから」を理由に
みすみす逃す気か？」

柴田「ごめん」

松坂「ごめんじゃねえよ。やるのか？やらないのか？」

柴田「やる！やるよ！私頑張るから！」

松坂「柴田！」

柴田「何？」

松坂「いいことを教えてやる。あの子は、ネタの宝庫だぞ」

柴田「！」

松坂「あの子は俺がこの店で見てきた数々の女達の中でも、ダントツの飛んだ

ズベ公だ」

柴田「ズベ…公…？」

松坂「あいつは大抵、彼女がいる男か、結婚している男をとつかえひっかえしてこの
店に連れてくる」

柴田「何故？」

松坂「私モテますアピールおよび、隣の芝生が大好物なんだろうな」

柴田「嫌なやつじゃん！」

松坂「とにかく柴田」

柴田「はい」

松坂「麻美から面白い話を聞き出せるも出せないも、お前の頑張り次第。

あいつの何故か無駄に自信に満ちた態度に臆する必要は無い。大胆に行け、
大胆に！」

柴田「大胆に…」

松坂「そうだ、お前はいつだってゼロか100かみたいなところあったらろ」

柴田「うん。うん？」

松坂「100で行け」

柴田「うん」

松坂「…チャンス、逃すなよ」

松坂、柴田に何らかの酒を渡す。

柴田、酒を飲み干す。

麻美、明子を連れて帰ってくる。

麻美「連れてきちゃった〜」

松坂「いらつしやい〜」

麻美「こちら、私と同じ会社で同期の明子ちゃんです」

明子「はじめまして。わー、麻美、こういう所に一人で来れたりするんだ。大人だね」

麻美「そう?」

明子「つていうか、マジでうちの会社と目と鼻の先だね、ここ」

麻美「でしょでしょ」

松坂「こんばんは、おしほりどうぞ」

明子「あ、ありがとうございます、こんばんは〜」

麻美「こちらが店長の松坂さん。イケメンでしょ〜」

明子「本当だ〜。イケメン〜」

麻美「あと…」

柴田「し、柴田です!」

麻美「うわ、びっくりした。…そう、柴田さん。ねー柴田さん超肌綺麗でしょ?」

明子「本当だ〜超綺麗」

柴田「え〜! そんなことないですよ! よし! じゃあ、恋バナでもしますか!」

明子麻美「え?」

松坂「大胆だな、お前」

柴田「だって女が二人揃ったら、するっきゃないつしよ、恋バナ」

麻美「あは! ウケる〜。さっきまでとキャラ違っし〜。さっきまで殆ど

しゃべらなかつたんだよ」

明子「そうなんですか?」

柴田「ああ、さっきのがゼロで今からは100なんで」

麻美「超意味わかんないんですけど〜」

松坂「あ、ごめんね、景気づけに一杯飲ませたらこんなになっちゃった」

麻美「ああ、そういうことね。お酒弱いんだ〜。超かわいい〜」

松坂「ま、とりあえず、明子ちゃんドリンクは？」

麻美「じゃあ、一杯だけ飲んでから、移動しよか」

明子「うん。じゃあ、カシスオレンジで」

柴田「かしこまりました！松坂、カシスオレンジ一丁！」

松坂「かしこまりました」

柴田「一杯だけと言わず、ゆっくりしていつてくださいよ〜」

麻美「また来ますから」

柴田「いやそれじゃ困りますから」

麻美「何ですか？」

柴田「いやそれは言えませんが〜」

麻美「今日は、明子が大事な話があるんで。ね？」

明子「うん。でも別にここでもいいけど」

麻美「マジで？」

明子「うん」

麻美「でも、おなか空いてるでしょ。ここ御飯とかあんまり無いし」

明子「大丈夫。実は、残業しながら納豆巻き食べちゃった。だから全然ここで話てもいいよ」

麻美「そうなの？でも、ほら、みんなに聞かれちゃうよ、大事な話」

明子「いや、むしろ聞いて欲しいかも。男の人の意見も聞きたいし」

松坂「俺？」

明子「はい…」

松坂「…はい、とりあえず、カシスオレンジです」

松坂、ドリンクを出す。

麻美明子「かんぱーい…」

麻美と明子、乾杯をする。

柴田「よし、じゃあ明子ちゃんの話、早速聞いちゃおう」

麻美「ちよつといきなり仕切らないでください」

明子「実は私彼氏がいるんですけど」

麻美「ちよつとー！」

明子「何？」

麻美「いや…いきなり本題だなんて思って」

明子「でもこういうのって切り出すの難しいじゃん。早速振ってくれたから

話しやすいなって」

麻美「…あそ」

明子「彼も同じ会社なんですけど、超秘密の社内ラブなんです」

柴田「超秘密の社内ラブ！」

明子「そうなんです、私達のこと知ってるのは、親友の麻美だけ。ね？」

麻美「うん…」

柴田「それいいじゃん！秘密のラブ？最高じゃん！」

麻美「明子、ここでその話しちゃって本当に大丈夫？」

明子「何で？」

松坂「僕達はお客様の秘密は100%守ります。そうだよ、麻美ちゃん」

麻美「そうだけど…」

柴田「で、どうして秘密なわけ？」

明子「彼にはアラフォー上司がいるんですけど、実はその人がすつごく彼のこと気

に入ってる」

柴田「なるほど。(メモっている)」

明子「はつきりと告白されたとかではないですよ。でも明らかに好意を抱いている感じで。

でも上司だから蔑ろにはできないし」

柴田「なるほどねえ」

明子「その女上司が社内でも有名なジャーナリストで、村田さんって言ってますけど影で

はジャニ田さんって呼ばれてて。ジャニ田さんは、超ネチネチして嫉妬深いらしくて」

柴田「嫉妬深い？」

明子「昔、堂本剛のこと好き過ぎて、ともさかりえに剃刀レター送ってたとか言って」

松坂「怖！20年くらい前に金田一少年とかで一緒に出てたもんね」

柴田「懐かしいなあ」

明子「はい。それで彼は、自分達の関係が明るみに出たら、私が働きにくくなるかもしれないから、暫くは内緒にしておこうって」

柴田「へえ。気遣いの出来るイイ男だねえ、彼は」

明子「はい、とっても優しいんです」

柴田「で？どんな人？」

明子「どんな人…うーん」

麻美「言いいにくかったら言わなくてもいいんだよ？」

明子「…何か…最近、牡蠣に当たってた」

柴田「何だそれ」

麻美「マジで？大丈夫なの？」

明子「学生時代の男友達と行った店で、みんな大丈夫だったのに、彼だけ」

麻美「へえ。知らなかった。大変だ」

明子「でも実は本当に男友達と行ったのかもやっつとしてるんです」

柴田「え、そうなの？」

明子「何だか最近、学生時代の男友達と飲みに行く率が異常に高いんだよね。

前は殆ど毎日うちに泊まってたのに、最近飲んで自分の家に帰っちゃっし」

麻美「えー。でも、それだけで疑うのも可哀想じゃない？」

明子「疑いたくないんだけどね、何か胸騒ぎがするというか…」

麻美「男同志でワイワイするのがやたら楽しい、みたいなのってあるんじゃない？」

松坂「うん、そういう時期あるよ。気にしすぎなんじゃない？」

明子「そうなんですかねえ…。一応、彼の携帯は見たんですけど…」

柴田「え？！」

明子「？」

柴田「いや…他人の携帯って見るもの？」

明子「他人のは見ませんが、彼氏のは見ますよ、普通」

柴田「そうなんだ。ごめん、何かごめん」

麻美「それで？どうだったの？」

明子「特に怪しいメールは無かった。てか、Eショップからのお知らせしか無かった」

麻美「なら大丈夫じゃん」

明子「しかもパスワード、私の誕生日だったし」

麻美「愛されてるじゃん」

明子「待ち受けも去年のクリスマスと一緒に撮った写真だし」

麻美「超愛されてるじゃん！何？結局のろけ？」

明子「そうじゃなくて、女の感？みたいなの？何か、胸騒ぎしちゃうんだよ」

麻美「考えすぎ」

明子「違うんだって」

麻美「何が？」

明子「私、今年、大殺界なんだよ」

麻美「ああ…」

明子「大殺界なのに恋愛が上手くいくはずがないじゃん」

「そうだよ、上手くいくはず無いんだ！やっぱ絶対何かある…。何かある…。」

麻美「明子落ち着いて」

柴田「何？大殺界って」

明子「えー、知らないんですか？」

柴田「知らない」

明子「六星占術。細木数子先生ですよ。一時期流行ってたじゃないですか」

柴田「ああ、あのおばちゃんの」

明子「細木数子先生です。大殺界っていうのは何をやってもうまくいかない八方

塞の運氣のことで、その時期は何か新しいことをしようとしても絶対に成

功しないんです」

柴田「何それ超嫌なんですけど」

明子「しかも大殺界は3年続きます」

柴田「そんなに！」

明子「そうなんです、で、私の場合は、今年2013年が3年続いた大殺界の

最後の年なんです」

柴田「当たるのそれ？」

明子「超当たりますよ。私今年、5年も生きてた金魚がいきなり死んだし」

麻美「金魚にしては大往生じゃない」

明子「でも、きっと私が大殺界じゃなかったらもつと長生きしてたの」

麻美「もう、明子…」

明子「どうしよう、これで本当に浮気されてたら。いや、浮気じゃなくて本気

だったりしたら…」

麻美「気にし過ぎだつて」

柴田「ねえそれつてどうやってわかるの？」

松坂「生年月日じゃなかったっけ？」

麻美「そうです、それです、自分でまず自分が何星人か調べて…」

柴田「は？星人？」

松坂「確か俺、天皇星人だったかな」

柴田「天王星？」

明子「私と一緒に…」

麻美「じゃあ松坂さんも大殺界ですね」

松坂「マジかく〜。確かに、俺も思い当たる節が…」

明子「でしょ!」

松坂「今年に入ってからめっきり売り上げが悪くなって…」

明子「ほら」

柴田「ねえねえ、それ、私も調べてよ」

麻美「じゃあ…。ちよつと待つてくたさいね(携帯で調べながら)生年月日教えてくたさい」。

柴田「1980年7月20日」

麻美、柴田が何星人か調べる。

麻美「…あ。…天王星人。…大殺界ですね」

柴田「げっ!」

明子「え!皆大殺界なの??怖い!」

麻美「因みに、私も…です」

明子「え!そうなの!」

麻美「うん」

明子「全然知らなかった!」

麻美「ごめん、だからほら…」

麻美、たくさんの数珠をつけてる、とかお守りを持つてるのを見せる。

柴田「凄っ」

明子「ねえねえ、その数珠効くの？どこで買ったの？いくらぐらい？てか何で教えてくれないの？ちよつと見せて…」

麻美「ちよいちよい、明子落ち着いて、落ち着いてっばっ！」

「軽くもみ合いになった明子と麻美。

思わず麻美が明子を冷たく振り払う。

麻美「あ、ごめん」

明子「…運命の人なの。彼だけは絶対に失いたくないのっ！（泣き出す）」

麻美「明子、泣かないでよ、まだ、何も起きていないのに」

明子「やつぱりジヤニ田と出来てたりして」

麻美「まさか、それは無いわよ。あんなチャーシューみたいな女に取られるわけ

ないでしょー！」

明子「そういうまさかの事態に陥るのが大殺界でしょ。ずるいよ、自分だけそんなに

数珠つけて」

松坂「柴田、お前もヤバいかもな。大殺界だつて」

柴田「ちよつと！不吉なこと言わないでよ！言っただろうが、これはチャンスなの！

絶対逃したくないのー！」

明子「無理ですよ、なんのチャンスか知りませんが」

柴田「でも、その大殺界？今年で最後なんでしょ？じゃあ今月を乗り切れば

いいんですよ」

松坂「今月じゃん。締め切り」

柴田「ぬ」

松坂「てか明後日じゃん」

柴田「ああっ（頭をかかえる）」

明子再び泣き出す。泣き声の中、柴田の携帯がなる。

柴田「うわ！」

松坂「おい、仕事 중이다ぞ」

柴田「ナベツネからだ。どうしよう！どうしよう！」

松坂「とりあえず出るよ」

柴田「う、うん」

柴田、電話に出る。

柴田「も、もしもし…あのまだちよつと出先で。さっきの件？ああ…あらずじですよね。え

つと…極秘の社内ラブです」

麻美「え？」

松坂「何？」

麻美「今、極秘の社内ラブとか言ってますでした？」

松坂「うそ？言った？」

麻美「はい」

松坂「さあ？しゃ…シャーラップ！って言ったんじゃない？」

麻美「なんで英語？」

柴田「あの、アラフォーの上司がまして」

電話をしながら、柴田、店の外へ。

麻美「ほら」

松坂「はい？」

麻美「アラフォーの上司つて」

松坂「まさか。あの…あれだよ、アラフォーつて言ったんじゃない」

麻美「何で？」

松坂「さあ」

明子「うえーん」

麻美「ああ、もう、明子、いい加減泣き止んでよ」

明子「…コンタクトずれた。ちよつとトイレ」

松坂「その扉です」

明子、トイレへ。トイレから泣き声がする。

明子「もうやだあ〜」

松坂「めちゃくちゃ泣いてるじゃん」

麻美「これ当分出てこないかも」

松坂「あらそう。困ったなあ」

麻美「大丈夫です、私連れて帰るんで」

松坂「本当に？大丈夫？」

麻美「大丈夫です全然。あの、その前に、お手洗いつてやっぱここだけですよね」

松坂「あ、実は外の階段上ったところにもあるよ」

麻美「そうなんですか！知らなかった。じゃあ、ちよつと行つて来ます」

松坂「行つてらっしゃい」

麻美、店の外へ。柴田が入れ違いで入ってくる。

松坂「お前あんまり堂々と電話で話すなよ…」

柴田「やばいどうしよう」

松坂「?どうした？」

柴田「あれ?あいつらは?」

松坂「トイレと…トイレ」

柴田「あそう」

松坂「で、どうした？」

柴田「あ、そうそう。明子の恋の話したら、面白そうだって、編集が乗ってきた」

松坂「やったじゃねえか!!」

柴田「うん、でもヤバイ」

松坂「何が？」

柴田「どんな彼氏なのかって聞かれちゃって」

松坂「それで？」

柴田「ターミネーターみたいな人って言ったら、それは違うから練り直せって」

松坂「そりゃそうだ」

柴田「だって、咄嗟にそれしか出てこなかったんだもん」

松坂「で、どうすんだよ」

柴田「後でまた電話するからそれまでに彼氏のキャラと、物語のオチをまとめとけって」

松坂「できるのかよ」

柴田「(首を横に振り)私にはもうシユワちゃんしか想像できない」

松坂「は？どうすんだよ」

柴田「実物呼んで観察するしかない。そしたらとりあえず彼のキャラクター

は出せる」

松坂「オチはどうする？」

柴田「わかんない。わかんないけど、彼氏がここに着てさえすれば、この物語は

動くでしょ。動き出しちゃったから。やるしかない」

松坂「お前、急に遅くなったな」

柴田「初めて、編集の人が面白そうって言うてくれたんだよ」

松坂「柴田…。わかった。じゃあ急がないとな。麻美が明子を連れて帰ると

言うてる」

柴田「逃がすかつー！」

松坂「まずは、明子が彼氏をここに呼ぶように説得しよう」

柴田「ありがとうー！」

柴田と松坂、明子のいるトイレへ。

松坂「あ、明子ちゃん、そろそろ出てこないかな？」

明子「(涙ながらに)絶対浮気してる…」

松坂「まだ言うてる。明子ちゃん、ここ、お店のトイレだしさあ」

明子「ごめんなさい…でも絶対浮気してるって思ったら、辛くて…」

柴田「めそめそ泣いてるんじゃないよー！」

明子「だってえ…」

柴田「勇気を出して、聞いてみよう彼に」

明子「そんな勇気ないですー」

柴田「呼んでみよう、彼を」

明子「どこに？」

柴田「ここに。そして聞いてみよう。ね？」

明子「無理です無理です！」

柴田「じゃあアンタずっと不安なままでいいの？」

明子「やだ」

柴田「じゃあ頑張らなきや」

松坂「お前、口も達者になったな」

柴田「すべては小説のため」

松坂「凄いぞ、柴田」

柴田「…もう走り出しちゃったから、止まれないんだよ、君は！」

明子「私？」

柴田「そう、あんたには主人公になってもらうよ」

明子「主人公？」

柴田「そう、この物語の主人公」

明子「どの、物語ですか？」

柴田「このの！（バー全体を指して）」

明子「どい？」

柴田「だからここだって」

明子、トイレから顔を出し。

明子「どこ、ですか？」

柴田「だからここだって！（バー全体を指して）」

明子「？」

柴田「ここは舞台、あなたは女優、仮面をつけるのよ、マヤ！」

明子「いや、明子です」

柴田「読んでないのかよガラスの仮面」

明子「すみません」

柴田「うぬぬぬ、いいから、時間がないんだ。早く彼氏呼べ！」

そこへ麻美が戻ってくる。

松坂「あ！麻美ちゃんが、聞いてくれるって」

麻美「？」

柴田「そうだ、それがあったか！」

麻美「なんですか？」

柴田「麻美ちゃんが協力してくれるって」

麻美「だから何？」

柴田「あなたの代わりに、聞いてくれるって、誰と牡蠣を食べに行ったのか、最近の

飲み会は本当に大学時代の友人か、浮気してないか。あなたが気になってい

る事ぜーんぶあなたの友達が聞いてくれるって」

麻美「え？え？え？どういう話になっちゃってるの？」

松坂「麻美ちゃん、よろしく頼むよ」

麻美「いやちよつと待つて」

柴田「今から彼氏呼ぶから、よろしく頼むよ」

麻美「良くわかんないけど無理！」

柴田「なんで？断る理由なんか無くない？」

麻美「だって、彼氏まだ仕事中心で言ってたじゃないですか」

再びトイレに籠る明子。電話の音が聞こえだす。

明子「あ、もしもし、私。お願いたすけて！飲んでたら何か暗い狭い部屋に

閉じ込められてんの、わかんない、わかんない、わかんない。わかんないけど…え？

仕事中？(ドアなどを叩き音を出す)キヤー！助けに来てくれないと死んじゃう！

キヤー！！壁が壁が迫ってくる！！！！場所？？？すぐ食べログ送るから！来てね

絶対来てね！絶対来てね！絶対…ぜつ…」

明子、トイレから出てくる。

明子「たぶん来ると思っています…」

松坂「そこまでされたらねえ…」

柴田「よっしゃー！（麻美に）よろしく！」

麻美「ちよつと待つて！」

明子「あの、私はどうしたらいいですか？」

柴田「うーん、まあ本人がいる前では色々あれだしねえ」

柴田「あ、じゃあ、あなた（明子）がトイレとか行った隙にさりげなく、あんだ

（麻美）が調査する」

明子「わかった。じゃあ私、トイレ行きます」

柴田「うん。トイレ行って」

明子「どうしよう、トイレに行きたくならなかったら…」

柴田「行きたくなった時でいいから。落ち着いて」

明子「でもトイレに行つたときり全然帰つてこなかったら、うんこかと思われちゃう」

柴田「大丈夫だから、女のトイレなんて20分くらい帰つてこないもんだから」

麻美「だからちよつと待つてば！」

松坂「どうしたの、恋愛ネタに乗つてこないなんて、らしくないよ？」

麻美「そんなじゃないですけど、荷が重いつて言うか…無理。私帰ります」

柴田「は？何で？友達困つてるんだよ？」

麻美「いや、何か…こういうの緊張しちゃう」

柴田「は？二人の良き理解者はあんだしからない」

そこへ明子の携帯が鳴る。

明子「どうしよう、彼からだ。もう来るかも」

柴田「もう？早くない？」

明子「会社、すぐ近くなんで」

柴田「とりあえず電話出て」

明子「はい」

麻美「私ちよつとお手洗い」

麻美、トイレへ

明子「え、ちよつと、お手洗いは私が」

柴田「早く電話出て」

電話が切れる。

明子「切れちゃった」

男が、凄いい勢いで入ってくる。

明子「来た!」

男「アキちゃん!?!?!?!あれ?」

松坂「いらつしやいませ」

柴田「いらつしやいませ」

男「アキちゃん…壁は?」

明子「壁?」

男「閉じ込められてるって…」

明子「あ…ごめん」

男「…なんだよ。仕事抜け出して来ちゃったよ…」

明子「ごめん。怒った?」

男「怒るっていうか…どうしたの?急に」

明子「あの…えつと…彼氏です。」

男「はじめまして」

松坂「はじめまして」

柴田「はじめまして」

明子「え、えつとこちらが店長の松坂さん、で新人の柴田さん」

男「どうも、明子がお世話になってます。向井です」

柴田「え?」

松坂「え?」

柴田「向井って…」

男「あ、向井オサムです」

柴田「やばい。…はいもしもし…はい、あすみません、さっきの続きですよね…えーっと
ですね、彼のキャラですよね…えーっとウォンバット…」

松坂「おい！」

向井「？」

柴田「あ、えっと、書いてるんですよ、書いてるんですけど、ちよつと今

高いところに閉まっちゃったんで、手が届かなくていやあの、オチ？オチはですね…

唯一秘密を知っている親友が飛んだスベ公でしてね…」

向井「なんの話ですか？」

松坂「気にしないでください。彼女の家庭の事情なんです」

向井「そうですか、なんだか大変そうだなあ。ははは」

柴田「…え？修羅場…はい、もうすぐ修羅場にはなると思うんですけど…」

向井「ちよつと、お手洗いお借りします」

松坂「あ」

向井トイレの扉あける。

そこに、麻美が立っている。

向井「☆-△★◎☆-」

麻美「こんばんは…」

柴田「あ、修羅場はトイレでばったりですね…あっ！」

松坂、柴田の携帯を取り上げ切る。

松坂「柴田もう少し小さい声で電話したほうがいいぞ」

柴田「あ、ごめん」

松坂「まあ、全然聞こえてないみたいだけど」

向井「…」

麻美「…」

麻美「びっくりした、よねっ」

向井「したよ！何これ？どういいうことっ」

麻美「牡蠣、当たったんだって？」

向井「え？」

麻美「明子から聞いた。私は大丈夫だったよ」

柴田「うわ、牡蠣もアンタだったんだ。衝撃」

向井「ちよつとどういうこと？グル？あなたもグル？」

麻美「店員さんは関係ないよ」

柴田「まあ、だいたい分かってますけど」

向井「は？説明してくれよ」

麻美「明子から、向井君が浮気してるんじゃないかって相談されたの」

向井「それで？」

麻美「もちろん、明子には、何も言っていないよ」

向井「(良かった)…」

麻美「言える訳ないじゃん。デ、私が席を外してる間に、向井君を呼んで、本音を聞いてみ

ようつてことになっちゃつてたみたいで…」

向井「意味わかんないよ」

麻美「私だって全く意味がわかんないうちに、そういう流れになつてたの！」

向井「そんなの断ればよかっただろ」

麻美「断る隙なんか無かったもん！」

柴田「まあ、確かに。断る隙を与えませんでしたね」

向井「何がしたいんだあなた達は」

柴田「いやちよつと、その言い方は無いでしょ。彼女の友達と浮気しといて」

向井「アナタには関係ないでしょ」

柴田「そうですね！むしろいいネタをご提供頂きありがとうございます！」

向井「はあ？」

柴田「こつちの話です！」

麻美「向井君、気をつけないと、明子に携帯見られてるよ」

向井「え？」

麻美「でも、消しているんだね、ちゃんと」

向井「そりゃ、当たり前だろ」

麻美「ふうん。そつか。当たり前前、か」

向井「バレたら君だつて困るだろう」

麻美「…。そう、だね。でも私は取つてあるよ」

向井「仕方がないだろう。そういう関係なんだから」

麻美「…そうだね」

向井「…」

麻美「ごめんね、びっくりさせて」

麻美、向井にもたれかかるなど。

柴田、じつくり観察している。

麻美「怒った？」

向井「怒つたつていうか…ちよつと、麻美ちゃん。離れて。ほら、店員さんも見てるし」

麻美「いいじゃん見ても。ねえ」

柴田「はい、気にしないでください」

向井「いやそういう訳には」

麻美「なんで？いつもみたいにラブラブしよ」

向井「やめろよ」

麻美「いつもみたいに赤ちゃん言葉使つていいよ」

柴田「げ！」

向井「おい！」

松坂は一切聞いていない振り。柴田は慌てて目をそらす。

向井「ちよつと麻美ちゃん、やけくそになつてあること無い事言うんじゃない」

麻美「やけくそなんかじゃないの。私ね、とっさにトイレに隠れてから』なんで私が隠れなき

やいけないの』つて凄く虚しくなつちやつた。なんで麻美が一番で私が二番なの？」

向井「…」

麻美「はつきりさせない？」

向井「…」

麻美「私のこと好きじゃないの？」

向井「…」

麻美「答えないんだ、ずるい。答えないって何？じゃあ何で私とハメちゃったんだろーねー」

向井「声が大きいよ」

麻美「…」

向井「…ごめん」

麻美「謝ってほしいわけじゃないんですけど」

向井「いや、ごめん」

麻美「それが、答え？」

向井「…」

麻美「また黙る」

向井「ごめん」

麻美「超ずるい。最悪。あーあ、帰ろうっと」

麻美、向井に抱きつく。向井驚く。

麻美、向井の財布を抜き取り離れる。

麻美「(松坂に)お会計お願いしまーす」

向井「おいっ!」

麻美「何か？」

向井「…」

麻美「はやく、お会計!」

松坂「はいただ今。(と、伝票に金額を書く)」

麻美、向井の財布から一万円札を出して払い、財布を向井に返す。

麻美「おつり大丈夫です。ご馳走様でした」

向井「え!あ、麻美ちゃん?」

麻美「私だけ、苦しい思いするのって不公平だなあ。向井君。殺されないように、
気をつけてね」

向井「え?」

麻美、去ろうとする。

柴田「待つて！だめだよこんな終わり方じゃ」

麻美「？」

柴田「だめだよこんな終わり方じゃ、(小説が)」

麻美「柴田、さん？」

柴田「あんた、それでいいの？」

麻美「え？」

柴田「好きならあの子と戦えよ！」

麻美「柴田さん？」

柴田「戦わなきゃ」

松坂「柴田、お前」

麻美「柴田さん…。もういいんです」

柴田「良くないよ。戦わないと、面白く…じゃなくて、何だ、あの、えっと…

幸せになれないよ！」

麻美「いいんです」

柴田「良くないんだつてば、アンタが頑張ってくれないと(小説が)」

麻美「ありがとうございます。でも、本当にもういいんで」

柴田「え〜！」

麻美「え〜つて何ですか！あは！柴田さんやっぱウケる！」

柴田「ちよつと？」

麻美「向井君」

向井「何？」

麻美「私、振られたの初めて。大殺界だからかな」

向井「へ？」

柴田「え？ちよつと、本当に帰るつもり？」

麻美「また落ちつたら顔出しますね」

麻美、去る。

柴田「うわ、帰った。もうひと波乱。もうひと波乱ほしかった…」

松坂「世の中の浮気の8割はバレていないっていうからなあ」

柴田「それじゃ困る」

松坂「現実はそのなもんだな」

向井「あ、あ、何かすみません、お見苦しい所を」

松坂「いえいえ」

向井「俺、殺されちゃうのかな」

柴田「物騒ですね。でもそれくらいあつてもいいと思いますけど」

明子「明子がい物袋持って帰ってくる。」

柴田「遅いよちよとーもつと早く帰ってきてくれないとー聞いてる？」

明子「向井君……」

向井「あ、アキちゃん。お、おかえり」

明子「向井君、麻美が……」

向井「麻美ちゃんなら帰ったよー」

明子「うん、今連絡来た」

向井「え？え？何て？」

明子「先に帰るから後は二人でゆっくりして」

向井「それだけ？」

明子「うん。それだけ」

向井「あ……そう。……あ、そう！そっかそっか」

明子「本当はそれだけじゃない」

向井「え？」

明子「私、向井くんのこと疑ってたの」

向井「いや……えつと……」

明子「浮気なんじゃないかって麻美に相談してて」

向井「……どつちだ……？」

明子「ごめんね、私嫌な女だよ。友達使って探りなんか入れさせて」

向井「そ、そんなことないよ！俺の方こそごめん。心配させて、本当にごめんね」

明子「向井くん！」

藤川「あきちゃん！」

明子「向井くん！」

向井「あきちゃん！」

抱き合う二人

柴田「何か腑に落ちないわ。あいつ運が良すぎでしょ。あいつも大殺界だったらいいのに」

向井、我に返って

向井「あ、お見苦しいところを」

松坂「いえいえ」

向井「(明子に)じゃ、俺仕事に戻るね」

明子「うん。頑張つてね」

向井「頑張るよ！ (松坂に)あ、じゃあお会計を…」

向井、財布を出すと何かが床に落ちる

松坂「先ほど、いただいておりますので」

向井「あ。そうでした…あの、おつりつて…」

明子、床に落ちたものを拾う

明子「何か落ちたよ…」

向井「え？」

明子「…オサム君いつもありがと。パイ揉みクラブ ありさ』…？」

向井「いや…知らない」

一同、しらけた目で向井を見ている。

向井「いや、知らない、知らない。知らない知らない。知らない知らない。

知らない知らない」

柴田「(思わず噴出し)松坂、この人『知らないっ』て言いすぎ！」

向井「(柴田を睨む)…」

柴田「あれ」

明子「やっぱり浮気してたんだ」

向井「してないよ。っていうか、風俗は浮気に入りますか？」

柴田「あ、認めた」

向井「そうじゃないけど！」

明子「ですよねえ、認めましたよねえ、今の」

向井「いや、本当に知らないってば」

明子「最低。風俗は、立派な浮気の一部です」

明子、店を飛び出していく。

向井「ちよつと、アキちゃん！」

向井、慌てて追いかける。明子を買ってきたコンビニの袋だけが残る。

松坂「ありがとうございますー」

柴田「なんだよこの終わり方。もっと面白くなりそうだったのに！」

松坂「しょうがないだろ」

柴田「麻美のこと全部話して修羅場作ってやれば良かった。悔しい！」

松坂「そんなことしたら地獄に落ちるぞ、お前」

柴田「小説のためならそれくらい構わないよ」

松坂「それに、ルール違反だ」

柴田「ルール違反？」

松坂「お客様のプライベートをバラすわけにはいかない」

柴田「なんで？あの子のためじゃん」

松坂「小説のためだろ」

柴田「もー。協力してくれるって言ったのに」

松坂「してるだろ。これだけ色々あったんだから後は色々想像して書けるだろ」

柴田「うーーん。男は女のみたらし団子のような乳房を…」

松坂「おいおいおい！おい！」

柴田「？」

松坂「何書いてるんだよ」

柴田「濡れ場？」

松坂「なぜそこから取り掛かる。しかも何を見てそうなる？」

柴田「パイ揉み…」

松坂「そこかよ！人を見ろ！人間観察！」

柴田「うるさいなあ、今考えてるの。あーあ、やっぱり女って彼氏が風俗に行つてるとむかつく

もんなの？」

松坂「いや、俺に女心聞くなよ」

柴田「そっか」

松坂「でもあれだつてわかんないよ。麻美が仕組んだわなだったのかも」

柴田「ええー！」

松坂「麻美、あいつの財布を一瞬ぶん取っただろ。その時に…」

柴田「マジで！それ超面白いじゃん。そのネタいただき」

松坂「ちよつとは自分で考えろよな」

再び柴田の携帯電話が鳴る。

柴田「うわっつっ！ナベツネ！！ああもうどうしよう、どうしよう…」

松坂「出るしかないだろ」

柴田「はい、もしもし…あ、あの彼氏のキャラですよね？はいはいはい、えっと…

えっと…どんなだったかな。えっと…風俗好きで、えっと……

あ！あ！電波が悪い電波が悪い、もしもし、もしもしー(電話を切る)ふう」

松坂「何の解決にもなつてない」

柴田「ねえどうしよう、松坂はあの二人どうなると思う？別れる？」

松坂「なんやかんや言つてずるずる続くんじゃないやね、情もあるだろうしな」

柴田「じょう？」

松坂「そう。情」

柴田「そういうもんなの？」

松坂「あれ？お前、さては男と付き合ったこと無いな？」

柴田「はあ？あるよ！めっちゃある！108あるよ」

松坂「煩惱の数かよ」

そこへ男が三人やってくる。

松坂「いらつしやいませ」

和田「三人なんですけど、いいですか？」

松坂「どうぞどうぞ」

和田「(後続の面々に)あ、大丈夫みたいです」

小谷野、木佐貫、和田、入ってくる。

松坂「いらしやいませ」

小谷野「俺、ハイボールで。お前も同じでいいよな」

木佐貫「…はい」

和田「僕、カルアミルクで」

松坂「かしこまりました。(酒を作り出す)」

木佐貫「…はあ。(ため息)」

和田「木佐貫、いい加減元気出せよ。せつかく課長がお前のためになあ…」

小谷野「いいんだよ和田。あんだだけ派手に社内で怒られたらなあ。無理もないわ」

木佐貫「やっぱ俺生きててもいいことなんか無いです」

和田「そんなことないだろ、今日課長が奢ってくれただろ、焼肉。旨かっただろ」

木佐貫「はい」

和田「良かったじゃん。あつたじゃん、いいこと」

木佐貫「そうですね。最後の晚餐が焼肉で本当に幸せでした」

和田「最後とか言うなよ」

木佐貫「俺なんか、死んだほうがいいんです」

小谷野「死ぬとか簡単に言っちゃダメだぞ、木佐貫」

木佐貫「死んで天国に行けば、子供の時に飼ってた犬が待ってるはずなんで。」

犬に癒してもらいます」

和田「木佐貫…。愛犬家なのは良いが、自殺したら天国にはいけないぞ」

木佐貫「え？そうなの？」

和田「自殺つてのは自分を殺すことだから殺人と一緒になんだよ」

小谷野「そうなの？」

和田「たぶん」

木佐貫「じゃあ誰が俺を癒してくれるんですか！」

小谷野「だから生きる。生きて、癒してくれる。パートナーを探せ」

木佐貫「いやでも一人暮らしだから犬は飼えませんし」

和田「木佐貫、課長は犬の話一切してないぞ」

小谷野「癒してくれる『人』な。『人』」

木佐貫「人？」

小谷野「だからさあ、彼女作るとか。女はいいぞ。なあ、和田」

和田「まあ。パートナーがいれば、何かあっても乗り越えられたりするもんですよ」

小谷野「彼女作れ、お前は仕事にこうなりすぎなんだよ(手でジェスチャー)お前がもつと楽に

生きる道はそれしかない」

木佐貫「課長…和田先輩…俺やつぱ死にます」

小谷野・和田「えええええ！」

木佐貫、その場で凶器になりそうなものを探すも見つからず。

お絞りで口をふさぐとか、何とか自殺を試みる。

慌てて止める人々。

木佐貫「くそっっ」

柴田「びつくりした…」

小谷野「すいません」

松坂「いえ。こちらは全然」

和田「どうした木佐貫、いきなり暴れて」

木佐貫「無理です」

小谷野「？」

木佐貫「俺が楽に生きる道が彼女作るしかないと言うのなら、それは、無理なん

です」

和田「何でだよ」

木佐貫「俺、童貞なんです」

小谷野「え」

和田「やつぱり」

木佐貫「やつぱり？バレてたんですか？」

和田「なんとなく、それっぽいなって」

木佐貫「気づかれてたかあ〜」

小谷野「俺は全然気づかなかったけどな」

柴田「あの、お待たせしました…」

柴田、ドリンクを出す。

和田「一旦、乾杯しますか」

二人、静かに乾杯をする。

小谷野「童貞かあ……」

木佐貫「しみじみ言わないでくださいよ。」

小谷野「お前いくつだ？」

木佐貫「25っす」

小谷野「なんだまだそんなもんか。だったらまだまだチャンスあるだろ。焦るなって」

木佐貫「そういう問題じゃないんです」

小谷野「俺だってそんなに早かったわけじゃないんだぞ」

木佐貫「いくつですか？」

小谷野「…21」

木佐貫「早いじゃないですか！何すか、自慢すか？」

小谷野「してない、全然自慢してない。落ち着け」

木佐貫「…すいません」

木佐貫、お酒を一気飲み

木佐貫「お代わりください」

松坂「かしこまりました」

木佐貫「焦つてるとかそういうのじゃなくて…実は俺、女性が怖いんです」

小谷野「女性恐怖症つてやつか」

和田「そうかあ。社内でもあんまり女の子達と目を合わせないとは思ってたんだ」

木佐貫「和田先輩、気づいてたんですね」

和田「まあね」

木佐貫「中学の時に、女子にいじめられてたんす。『木佐貫タッチ』っていう遊びがあつて」

小谷野「何だそれ？」

木佐貫「ジャンケンで負けた女子が俺を小突いて逃げるんです。それでキモイだの何だのっ

て騒いで最終的に女子全員が超念入りに手を洗うんです」

小谷野「なるほど」

木佐貫「それが完全にトラウマになつてて」

和田「可哀想に」

木佐貫「でも俺、一日の大半はエロい事を想像してるんです。会社で名刺整理してて女性の

名前見ただけでも、ムラムラが止まらなくなつてトイレに駆け込む程なんです」

和田「お前何やつてんだよ会社で」

小谷野「そうか。やる気はあるんだな」

木佐貫「はい！めっちゃあります！でもいざとなると、どうしても中学の時の思い出が

フラッシュバックして…」

小谷野「そうだったのか」

木佐貫「仕事もダメ、女もダメ、つまり死ぬしかないんです…死ぬしか！」

木佐貫、再び何かで死のうとする。

和田「だからだめだつて」

木佐貫「マスター」

松坂「はい」

木佐貫「漂白剤ありますか？飲みたいんですけど！」

和田「早まるなつて。いずれ運命の人が現れるから！」

木佐貫「そんなロマンチックな言葉に騙されませんよ！」

和田「本当に頑なだなあ、お前は」

小谷野「よし分かった！俺が何とかしてやる！」

木佐貫「？」

小谷野「俺が何とかしてやるから、死ぬな！」

そこに、明子入ってくる。

松坂「いらつしやいませ、あ」

柴田「戻ってきたー！」

明子「あの…さつきは、お騒がせしちゃつてごめんなさい…忘れ物を…」

柴田「あ、ナプキンだ、生理の」

木佐貫「ぶっ(酒を噴出す)」

明子「大丈夫ですか？(ハンカチで拭いてあげる)」

木佐貫「！…！…！…！」

明子「？」

和田「あ、大丈夫なんで」

明子「でも…」

和田「本当に、大丈夫なんで。触らないでください、こいつには」

明子「はあ」

明子、木佐貫から離れる。

柴田「ちよつと、あんた達、どうなったの？」

明子「…わからないです」

柴田「わからないって？話し合っていないの？」

明子「はい」

柴田「え？だつて追いかけて出て行ったでしょ、ムカイオサム」

和田「え、向井理が来るんですか？(…)」

柴田「あ、向井オサムって言つても、あれよ、この子の彼氏よ」

和田「え？そうなんですか？…スキヤンダルだ…」

明子「はい、でも今日は話したくないから、全力で走つて逃げてました」

柴田「逃げたの？！」

明子「あ、私元々国体のマラソンの選手だったんで、走るの得意で…」

柴田「そんなことはどうでもいいんだけどさ、困るよ」

明子「え？」

柴田「時間が無いんだから。ちゃんと答え出さないよ」

明子「時間無いですかね？」

柴田「そうだよ。ドラマチックな展開にしてくれないと、人生一度きりですよ。迷ってる

暇ないの。締め切りがあるんですから」

明子「締め切り？」

柴田「出しなさい、答え。今日」

明子「今日！？」

柴田「今日。締め切りがないと、ダラダラダラダラ、ズルズルズルズル、いいの？それでいい

の？恋愛にも、締め切りが必要よ」

明子「…ちよつと、電話してきます」

和田「向井理にですか？」

明子「そう、ですけど？」

和田「すげえ…」

明子、外へ。

松坂「やつばお前、この短時間で超口が達者になってるよな」

柴田「すべては小説のため！」

木佐貫「運命」

和田「は？」

木佐貫「運命だ。あの子」

柴田・松坂「え？」

和田「何言ってるの？」

木佐貫「あの子、俺のこと気持ち悪がらなかった。俺のこと触った…課長！どこですか

課長！」

小谷野「どうした？俺はここにいるぞ」

木佐貫「あ、課長！さっき、課長、何とかしてくれるって言いましたよね」

小谷野「ああ。言った」

木佐貫「俺、あの子、口説きたい」

柴田「！」

木佐貫「力を貸してください」

小谷野「マジか」

和田「木佐貫それは無理だ、相手はムカイオサムだぞ」

木佐貫「関係ねえよそんなの。運命の人が現れるって言ったのお前だろ」

和田「言ったよ、言ったけどさあ…」

小谷野「よしわかった。俺が何とかする！」

木佐貫「課長！」

小谷野「まず俺が口説いてきてやるから。そこで一緒に飲むところまでセッティング

してやる」

和田「そんな無茶な」

小谷野「何だよ無理だつて言うのか」

和田「いやいやいや、あの、確かに課長は男気があつて、社内でも男性社員からの人望は

厚いですよ、でも課長が、ムカイオサムの彼女を口説くなんて…」

小谷野「なんなんだよさつきからムカイオサム、ムカイオサムつて、誰だよ、それ」

和田「知らないんですか!?!」

小谷野「知らねえよ」

和田「アサヒビールのCMの子ですよ！」

小谷野「全然知らねえ」

和田「メンズビオレのCMの子ですよ!肌男ですよ!」

小谷野「だから知らねえんだよ!そもそも俺んちテレビ無えんだよ!」

木佐貫「ちよつと二人ともいい加減にしてくださいよ!結局口説いてくれるんですか、くれ

ないんですか?」

小谷野「だから口説くつてんだろ!」

木佐貫「課長!」

小谷野「その代わり、今夜あの子を口説いたら、もう二度と死ぬなんて言つて暴れたりす

るなよ」

木佐貫「はい!」

和田「木佐貫…」

柴田「あの！」

木佐貫「はい？」

柴田「私も応援します、頑張ってください！」

木佐貫「え？」

柴田「彼女、今彼氏と別れるか別れないかの瀬戸際なんで、心の隙間に上手い事入り込めれば、きっと大丈夫！」

木佐貫「お姉さん！ありがとうございます！」

柴田「これは相当面白くなってきた。(わくわく)」

松坂「すべては小説のため。か」

柴田「まあね。コマにはどんどん動いてもらわなくちゃ」

松坂「だんだん恐ろしい女に思えてきたよ、お前なこと」

小谷野「よし、じゃあ、彼女が戻ってきたら、俺の巧妙な話術で、何とか一緒に

飲むところまでもつていく」

木佐貫「課長！ありがとうございます！その後どうしたら…」

小谷野「そうだなあ、時々、愛想笑しながら彼女のグラスの水滴でも拭いておけ。田舎から出てきたばかりで都会色に染まっていない口下手なキャバ嬢のようにな。お前が肩

肘張って頑張らなくても、彼女の前でお前のご褒めちぎってやつからよ！」

木佐貫「そこまでしていただけるなんて！すいません！」

小谷野「いっついでよ」

木佐貫「あとキャバクラ行ったこと無いんで、その例え全然わかんなくて、すいません」

小谷野「ああ、気にするな」

和田「そんなに上手く行きますかね」

小谷野「和田！」

和田「は？」

小谷野「アメリカ人は言いました。『カモン、ドンビー、シャイ』」

和田「は？」

明子、「戻ってくる。」

柴田「うわ、意外と早い。お帰りー」

明子「…」

柴田「あの、明子ちゃん、どうなったの？」

明子「別れたいって伝えました…」

柴田「ほう。そうになりましたか」

明子「…」

柴田「あの、参考までにそういう気持ちに至った経緯を…」

明子「風俗は浮気に入らないって言ったじゃないですか、彼」

柴田「言つてたかも」

明子「そこです」

柴田「そこ、ですか。(メモする)」

明子「風俗であろうと無かろうと、結局私以外の女の人の身体を欲する

というのには変わり無いじゃないですか」

柴田「なるほど」

明子「それが、許せなくて。私だけを見てほしくて。そしたらね、ふと

エッチなDVDとかも借りてるのかな？とか気になって、それも聞いてみた

んです。そしたら彼、何ていったと思います？」

柴田「何て言ったんだろ？」

明子「え？それは別によくね？って」

柴田「うん」

明子「結局ガンガン借りてるってことだったんですけど、私、それも許せなくて」

柴田「ああ、そう」

明子「柴田さんなら許せます？」

柴田「…どうだろ」

明子「私って嫉妬深い女なんですかね？今まで彼の携帯普通に見てたけど、

もしかしてそれも非常識だったんですかね？」

柴田「ああ…確かに携帯見るのは…」

小谷野「いいんじゃないかな、嫉妬深くて」

明子「え？」

小谷野、ちよつとずつ明子に近づく。

小谷野「お嬢さん」

明子「？」

柴田「声小さー！」

和田「ダメだ俺、見てらんねえ」

小谷野「お嬢さん(痰がからむ)」

柴田「痰絡んじやったよ」

明子「？」

小谷野「君に涙は似合わないよ」

明子「？」

小谷野「マスター、彼女に、何か涙の乾く飲み物を」

和田「何だそれ」

松坂「かしこまりました」

松坂、酒を作る。

小谷野「ただの通りすがりのおじさんの意見だから、聞き流してもらっていいんだけど、

嫉妬っていう感情は恥じるものではないと思うんだ」

明子「そうでしょうか」

小谷野「フランスのことわざでね『アダムが一度遅く帰ったとき、イブは彼の肋骨を数えはじめた』っていうのがあるんだけどね」

明子「何ですか、それ」

小谷野「神は最初にアダムを作り、その後にアダムの肋骨からイブを作ったんだ」

明子「はあ」

和田「何の話してんだよ課長！怪しすぎるだろー！」

柴田「ちよつと静かに！」

和田「だつて…」

小谷野「ある日、アダムの帰りが遅いことに不信感を覚えたイブは、帰ってきた

アダムの肋骨を数えたんだつまり、他に女が作られていないかと、嫉妬したのさ」

明子「あ…へえ…」

小谷野「人類の歴史は嫉妬の歴史でもあるんだ。だから君は、何も恥じることもなんか

無いんだよ」

明子「詳しいんですね。凄い」

柴田「意外と刺さったな、この話」

木佐貫「つていうかこの間俺が教えてあげた話なんですけど」

柴田「そうなの？」

木佐貫「こう見えて俺、フランス文学研究してたんで」

柴田「マジか…」

小谷野「詳しいつていうか、フランス文学が好きだから？」

明子「そうなんですか！？」

松坂「お待たせしました、涙の乾く飲み物です」

明子「何ですか？これ」

松坂「あ、ウーロンハイです」

小谷野、飲みかけていた自分のドリンクを吹く。

小谷野「ちよつと〜」

明子「大丈夫ですか？」

小谷野「すみません」

明子「いえ」

小谷野「ちよつとちよとマスター！ウーロンハイはないでしょ。せつかく初めてお会い

するお嬢さんなんだから、何かパイナップルとか刺さってるヤツにしてよ〜」

明子「(笑う)」

小谷野「あ、笑った」

明子「ごめんなさい、何かさっきまでのキザなキャラとのギャップが…あはは」

松坂「あれ？あの子、ギャップにキョキョンしてないか？」

木佐貫「マジっすか？」

小谷野「確かにウーロン茶つて飲めば飲むほど喉渇くけど」

明子「え、そうなんですか？」

小谷野「あれ？知らない？割と有名な話だよ？ウーロン茶つて、脂分を分解するから、

喉の油分も取られちゃうんだ」

木佐貫「これも、僕が教えた雑学っす」

和田「マジか」

明子「(笑顔)凄い物知りなんですね〜」

小谷野「そんなことないよ。あ、あとね、凹んだピンポン球はお湯につけると膨らむよ」

明子「え、本当ですか？」

小谷野「知らなかった？」

明子「知らなかった。本当ですか？」

小谷野「本当だつて！」

明子「本当かどうか調べよう」

小谷野「え、ちよつと信じてよ」

明子と小谷野一緒にスマホをいじり出し、暫く楽しそうに。

和田「いい感じになってない？」

柴田「何あの子、バカなの？」

松坂「完全に形勢逆転したな」

柴田「え？」

松坂「今、会話のイニシアチブは完全に明子が握っている」

木佐貫「どういうことですか」

松坂「明子はわざと、課長さんのどうでもいい話の聞き役に徹して、彼を気持ちよく

させてあげています。つまり口説かれているのではなく口説かせている」

木佐貫「何のために？」

松坂「自分が一時的に慰めてもらう為に」

木佐貫「え！」

明子「(スマホ見ながら)あ、本当だ。凄い。お兄さん凄いですね！(笑顔)」

小谷野「いいですね」

明子「え？」

小谷野「素敵です、あなたの笑顔」

明子「やだ」

小谷野「何があつたか詳しいことは知りませんが、あなたの笑顔を見るだけで、幸

せな気持ちになれる人だっているんですよ」

明子「そうですかね」

小谷野「そうですよ。でも、今日は無理して笑う必要ありません」

明子「？」

小谷野「何か辛い事があったんでしょう」

明子「…」

小谷野「今日は思いつきり泣いたら良いですよ。なんなら、肩くらい貸しますけど」

明子「…」

小谷野「…あれ？あれ俺何か変なこと言いました…？」

明子「…」

小谷野「ごめんなさい、あのセクハラじゃないですよ…」

明子、小谷野にわっと泣きつく。

松坂「はい来た」

木佐貫「ええええええ！」

小谷野「ええええええ！」

明子「暫く、このままでもいいんですけども、いいですか？」

小谷野「も、もちろん！」

松坂「これは逆に食われるぞ」

木佐貫「俺の運命の人が…」

和田「また探そう。な？」

木佐貫「…」

そこへ向井がやってくる。

向井「すみませんアキちゃん戻ってきました…」

小谷野に寄り添う明子を発見する向井。

硬直する人々。

明子「あ」

向井「…誰？その人」

明子「…誰だっというんでしょう」

向井「いやいやいや、良くないですよ。誰？」

明子「知らない。まだ名前聞いてないもん。」

小谷野「小谷野です」

明子「だって」

向井「おかしいでしょ」

明子「おかしい？何が？」

向井「名前も知らない人にそんなにくつついちゃって」

明子「自分だって、パイ揉みクラブで知らない女の子とくつついてたんでしょ？」

向井「だからそのことについてはちゃんと話し合おうって」

明子「話すことなんか無い。別れる」

向井「アキちゃん」

和田「あの人、誰ですか？」

柴田「あ、あの方が向井オサム」

和田「は？」

柴田「明子ちゃんの彼氏」

和田「え？どこが？」

松坂「向井理と同姓同名のサラリーマンです」

和田「はあ？？？」

和田の大きな声にみんな振り向く。

和田「ムカイオサムだとお？」

向井「はい？…そうですけど」

和田「どこがムカイオサムなんだよ！言ってみろよ」

向井「どこがって、名前がですけど」

和田「全然違うじゃん！がっかりだよ！」

向井「何なんですか？いきなり」

和田「紛らわしいんだよ！僕はねえ、向井理の大ファンなんだよ！」

向井「…知らないですよそんなこと！！俺だってあいつのせいで迷惑してんです！」

和田「じゃああなたが名前変えたらいいでしょ！」

向井「何でだよ、言つとくけど、俺のほうがあの方の向井理より一年多くムカオオサムやってんだよ！」

小谷野「和田、落ち着けて」

向井「何なんですか、あんたら仲間ですか？」

小谷野「仲間って言うか、まあ、そうですね」

向井「あんた達、うちの明子口説いてどうする気だったんすか？」

向井、小谷野の胸倉つかむ。びびる小谷野。

明子「向井君やめて」

小谷野「違います！！俺も頼まれて仕方がなく！！」

向井「誰にだよ？」

小谷野「こいつす。(木佐貫をさす)」

木佐貫「えー……いつもこうだもんな」

小谷野「許せ木佐貫！」

向井「お前が主犯か。一発殴らせろ」

木佐貫「いいですよもう、一発じゃなくて百発くらい殴って撲殺してください」

和田「木佐貫」

向井「いい度胸だな」

木佐貫「死にたかったんで、丁度いいです。…あーあ、童貞のまま、死ぬのかあ。

誰かさんのおかげで、童貞のまま死ぬのか。やってみたかったな〜一回くらい」

小谷野「木佐貫、すまん！お前の獲物を…」

向井「獲物だと！？」

小谷野「こいつ、今日童貞を捨てないと死ぬっていうから」

向井「ふざけんなよ！そんなもん風俗に行けばいくらでもやらせてくれんだろ

うが！」

向井、和田を殴ろうとする。

和田、木佐貫をかばう

和田「やめろっ！」

向井「なんだよ」

和田「殴るなら、俺を殴れ」

向井「は？」

木佐貫「和田先輩」

和田「木佐貫。一回しか言わないから良く聞けよ」

木佐貫「はい」

和田「俺じゃだめか？」

木佐貫「へ？」

和田「俺はお前を裏切ったりしない」

木佐貫「何がですか？」

和田「だから、その…恋人とか…童貞…とか」

木佐貫「へ？」

和田「…もう…だからあ…(恥らっている)」

木佐貫「ちよつと、和田先輩何いつてるんですか？」

和田「どうせ女の人怖いんでしょ。じゃあ、男でいいじゃないっ！」

木佐貫「えー…！！！！！」

柴田「まさかの展開！（とメモとる）」

向井「わけが分からない」

明子「向井君」

向井「どうしたアキちゃん、もう大丈夫だ」

明子、向かいにビンタ。

向井「痛っ！」

明子「やっぱり行つてたんだね、風俗」

向井「あ…」

明子「嘘つき」

柴田「修羅場連発…(以後、必死にメモリながら話を聞き続ける)」

向井「…ごめん」

明子「許せない」

向井「でも好きなのは、アキちゃんだよ」

明子「じゃあどうして私以外の女の人とそういうことするの？」

向井「ごめん」

明子「謝つて欲しいわけじゃないの。理由が聞きたいの」

向井「風俗は何と云うか、愛とか恋とかそういうのじゃなくて、ゲームというか

スポーツとうか…そういう感覚で行つてて…」

明子「じゃあもう行かないで。絶対行かないで！」

向井「…」

明子「どんなゲームでも、スポーツでも、私が相手するから」

向井「え？」

向井の携帯電話が鳴る。ジャニ田から。

明子「ジャニ田？」

向井「うん」

明子「出ないで」

向井「でも仕事、抜け出したままだから」

明子「私のこと好きなら出ないで」

向井「アキちゃん、ジャニ田とは何でもないって」

明子「嫌なの、例えジャニ田でも、許せないの。私だけを見ていて欲しいの」

向井「アキちゃん…」

向井、電話を切る。

明子「向井君」

向井「アキちゃん」

明子「向井君！」

向井「アキちゃん！」

明子、笑い出す。

向井つられて笑い出す。

小谷野「あれ？俺振られた？」

松坂「まあ、とつくに、ですけど」

明子「おじさま、ありがとう。貴方のフランスのことわざのおかげで素直に
気持ちぶつけられました」

小谷野「おう。幸せに、な」

明子「はいっ！」

木佐貫「何が『幸せに、な。』だよ！」

明子「？」

木佐貫「それ、本当は俺なんですけど」

明子「え？」

木佐貫「この人が得意げに言つてた雑学全部、俺のやつなんですけど。フランス

文学研究してたのも俺だし」

明子「え？そんなんですか？」

小谷野「すみません…」

明子「えつと、じゃあ、ありがとうございました」

木佐貫「お礼とか別にいららないんで、やらせてほしいんですけど」

明子「え？」

木佐貫「自分を肯定してくれる男なら、ホイホイとについていくヤリマン女なんでしょ？」

明子「…」

向井「てめえ、話を蒸し返してんじゃねえよ」

木佐貫「だって本当のことだもん、みんな、見えましたよね？ね〜？」

明子「…」

木佐貫「あんただって見たじゃん」

向井「…」

木佐貫「ヤリリーマン！ヤリリーマン！あそーれヤリリーマン！」

明子「…」

和田「やめろ木佐貫」

明子「！（和田が庇ってくれたと喜び）」

和田「ヤリマンってのは、ゲイの間では褒め言葉だぞ、悪口みたいな使い方するな」

明子「もういっしょ〜」

明子、トイレに籠る。

松坂「また引きこもる。明子ちゃん！この癖直そうか。明子ちゃんのお部屋じゃないんだよ」

向井「すみません、僕が連れて帰るんで」

向井の携帯がなる。

向井「ちよつとすみません。もしもし、向井です…すみません…あの実家の犬が俺に会いたくて家でいたらしくて…実家ですか？横浜なんですけど…」

などと電話しながら外へ。

和田「木佐貫…俺はそんなお前でも、いいよ」

木佐貫「はい？」

和田「返事は、気長に待つから」

木佐貫「いや待たないでください」

小谷野「よし、じゃあ、帰るか」

木佐貫「課長、一言言わせてもらっていいですか」

小谷野「何かな？」

木佐貫「あんたマジ最高かつこわるいよ」

麻美、入ってくる。

店の外で電話している向井は麻美が入ったことに気づいていない。

柴田「あ、麻美ちゃん」

麻美「戻ってきちゃった」

柴田「何で？」

麻美「柴田さんの言うとおりでななつて思つて」

柴田「え？」

麻美「戦わないと、幸せにはなれないって」

柴田「ああ。言ったかも」

向井、「戻ってくる。」

柴田「ヤバイまた修羅場だ！（メモに必死）」

向井「すみません一瞬会社戻るんで…アキちゃんを…」

麻美「向井君」

向井「麻美ちゃん！いつの間に？」

麻美「何か必死に電話してたから…」

向井「ああ、まあ…え何で戻って来たの？」

麻美「向井君に、言いたいことがあって…」

向井「あ！じゃあ今度言おうか、今度。今度今度」

麻美「ううん、今日会えたから、今日言う」

向井「今日はまずいんじゃないかなトイレにね」

麻美「私やっぱり向井君が好きです！」

向井「麻美ちゃん今、それ言っちゃダメだっ」

麻美「私、やっぱり別れたくない。明子に負けたくない！」

向井「それマジで言っちゃダメだっ」

トイレを流す音がして、明子がトイレから出てくる。

麻美「うわ。マジ」

明子「どうしたのみんな？何かあった？」

明子、静かに椅子に座る。

麻美「明子、聞こえてた、よね？」

明子「すみませーん」

松坂「はい」

明子「割つてもいいグラス30個くらいあります？」

向井「アキちゃんちよと落ち着いて」

明子「なーーーーー(叫ぶ)触らないで、汚らわしい！」

麻美「明子、ごめん」

柴田の携帯が鳴る。

柴田「もう、忙しいのに！」

柴田、ノートを取りつつ電話に出る

柴田「はいもしもし今ちよつと取り込み中で…書いてますよ、書いてますって修羅場が

次々押し寄せてくるんでもうノートパンパンで…だから送りますって…すぐ送りますから…送りますって言うてるでしょ！」

明子「うるさいのよ！」

柴田「うるさいのよ！（電話切る）あ、切っちゃった」

明子「許さない」

明子、麻美に飛びかかるとか髪の毛ひっぱるとか

頬をつねるとか。近くの人には止めようと必死。

柴田、ノートを投げ出し、携帯をビデオモードにし女のケンカを

撮影する。

松坂「それはやめろ！（慌てて携帯を取り上げる）」

向井「ちよつとアキちゃん待って！アキちゃん待って！」

明子「うるさい！」

ケンカをとめていたはずの向井が明子の標的になり、超叩かれる。

向井「痛い、アキちゃん凄く痛い」

明子「信じられない！風俗だけじゃ飽き足らず、彼女の友人にも手を出す

エロDVDは見まくる、もう鬼畜じゃん。鬼畜っ！」

小谷野「確かに、凄い性欲だ」

明子「(泣く)大殺界、マジ最悪！」

明子、小谷野に泣きつく。

向井「アキちゃん！」

小谷野「戻ってきた。どういうシステム？」

木佐貫「何で俺じゃダメなんだよ！」

和田「木佐貫！！お前には俺がいるだろ！」

木佐貫「しつこいよー！」

麻美「木佐貫？」

また柴田の電話がなる。

柴田「もしもしあ、すみません。さっきは近所の子供がうるさくて…彼氏のキャラ設定

なんですけど、凄いや性欲の鬼畜で…」

松坂「柴田、丸聞こえ！」

またすぐに電話鳴る。今度は向井。

向井「失礼。(電話に出る。相手はジャニ田)はいもしもしすみません…

あの戻ってる途中で実家の犬によく似た犬を見かけたもので…すぐ戻りま…」

明子「ジャニ田からの電話とってるじゃんくくく(泣きながら小谷野に継る)」

小谷野「俺、何なんだろう」

松坂「何か…持つところなんですかね？」

小谷野「はあ…」

松坂の携帯も鳴る。

松坂「失礼。はいもしもし…あ、どうもどうも！ちよつと今日満席で…」

木佐貫「なんだよ皆して電話して、うるせえよ」

なんとなくみんな電話終わる。

木佐貫の携帯も鳴る。(和田から)

木佐貫「え?え?」

木佐貫電話に出る。

和田「木佐貫、好きだ」

木佐貫「無理っす。(切る)」

和田「なんでだよ。お前の机毎日綺麗に拭いてやってるじゃん」

木佐貫「そんなことしてたんすか!」

和田「お前の家の、風で吹っ飛んだ洗濯物、いつも拾ってやってるじゃん」

木佐貫「なんでウチ知ってるんすか」

和田「心配だから」

木佐貫「ストーカーじゃないっすか」

和田「違う、ただ木佐貫のことが好きなだけだ」

麻美「やつぱり木佐貫だ」

木佐貫「？」

麻美「私、同じ中学の永川。永川麻美」

木佐貫「…うわああ!」

木佐貫、慌てて和田の元へ。和田にしがみつく。

和田「どうした木佐貫？」

木佐貫「俺の…トラウマ」

和田「トラウマ?こいつか」

木佐貫「そ、そうです」

麻美「?」

和田「こいつに近づかないでください」

麻美「いや近づいてませんけど」

和田「こいつは、アンタが生み出した生み出した木佐貫タッチゲーム?のせいで

女性が苦手になつてしまつたんだ」

麻美「木佐貫タッチゲーム？」

和田「そうだよ」

麻美「覚えてないわ」

木佐貫「覚えていないだと？あのゲームのせいで、俺の人生はめちゃくちゃになつたんだぞ」

麻美「はい？」

柴田「あ、何か未だ童貞みたいですよ」

麻美「えー！キモ」

木佐貫「お前のせいだつてんの！！（麻美に迫る）」

麻美「きゃー！！」

木佐貫「きゃーとか言うなっ！」

麻美「だつてキモいんだもん！」

木佐貫「だつたらさつさと帰れよ。ブス！」

麻美「ブズじゃねえし、お前が帰れよ！童貞！」

木佐貫「言われなくても帰るよ！俺はお前になんか一生会いたくなかつたのに最悪だ

よー！行きましょ…（小谷野に）いつまで寄り添つてるんすか！」

小谷野「もう肩。パンパン。すっげー体重かけてきてるの…」

向井「アキちゃん、離れるんだ」

明子「嫌」

麻美「じゃあ、向井君、私と帰ろう」

明子「ダメ、向井君は私と帰るの！」

麻美「あんたそのオッサンにずっとぶら下がつてんじゃん」

明子「これは別にそういうんじゃないもん」

小谷野「まいったぜ」

麻美「向井君、どうすんの、これ？」

明子「向井君！」

麻美「向井君！」

明子「向井君！」

向井「…俺、仕事に戻るわ」

明子「はあ？」

麻美「逃げるの？」

木佐貫「はいフラれた〜。」

麻美「黙れ童貞」

木佐貫「うるせえヤリマン」

和田「だから、ヤリマンはゲイの世界では褒め言葉なんだって」

木佐貫「和田先輩黙ってて！」

向井「もう、隠すの疲れた」

向井の電話が鳴る。

向井「電話に出る）あ、もしもし…戻ります。犬？あ、すみません嘘です。本当は女です。

メス犬じゃなくて人ですね…はいそうですよ。彼女くらいいますよ。詳しくは戻ってから。今度こそすぐ戻るんで」

向井、電話を切る

明子「ちょっと向井君！」

向井「アキちゃん明日から大変かもね」

明子「はあ？私を守ってくれないの？」

向井、去る。

明子、泣き崩れる。

小谷野、明子を慰めようとする。

明子「触らないでっ！」

小谷野「え…？」

和田「つていうかき、木佐貫」

木佐貫「何すか？」

和田「しゃべってるじゃん。トラウマ」

木佐貫「あれ」

和田「克服できたんじゃないね？」

木佐貫、麻美に近づく。

麻美「何よ」

木佐貫「ブース」

麻美「は？」

木佐貫「ブース、ブース！」

麻美「ブースじゃないもん！」

木佐貫「(和田に)本当だ会話できる」

木佐貫「(麻美に)ブーーーーース」

和田「言いすぎだろ」

麻美「マジ、最悪。もう、帰る」

松坂「あ、麻美ちゃん！」

麻美「なんですか？」

松坂「また、来てね」

麻美「どうでしょうね」

木佐貫「二度と来るな！」

麻美、去る。

木佐貫「悪霊、退散！」

松坂「悪霊じゃねえよ貴重な常連客だよ」

木佐貫「すみません…」

明子「あ…私も行きます…」

明子、去る。

小谷野「あ、明子ちゃん、待つて…うわ最悪だ(肩をさすりながら)…明子ちゃん、

お腹空いてない？ラーメン行かない？明子ちゃん」

小谷野、明子に着いて行く。

木佐貫「かつこ悪！」

和田「そうかな」

木佐貫「？」

和田「童貞こじらせてるお前より、かつこいよ」

木佐貫「はあ？和田先輩俺のこと好きな癖になんすかその態度！」

和田「調子に乗ってんじやねえよ！だからダメなんだよ！お前このままじや

一生童貞だからな！」

木佐貫「調子に乗るよ、トラウマ克服したんだから！俺、ずっとオドオドしてながら

生きてきたんすよ！」

和田「オドオドしてるお前が良かったんだよ！」

木佐貫「気持ち悪いっす」

木佐貫、去る。

和田「(ため息)木佐貫…」

柴田「みんな、大殺界だったのかな」

和田「どうして知ってるんですか？！」

柴田「大殺界なんですか？今年」

和田「はい。あいつもです」

柴田「あいつ…きさぬき、さん？」

和田「そうです」

柴田「やつぱり。この店、大殺界の人しか来ないから」

和田「そうなんですか！？」

松坂「まあ、偶然なんですけど」

柴田「うちらが悪いんじゃないかって、大殺界が悪いんですよ」

松坂「飲み、行きますか」

和田「行きましようか」

松坂「よし、今日はもう閉店。柴田、片付けるぞ」

柴田「はいよ」

和田「じゃあ、先に店行ってます。駅前の安いところ。5時までやってるあそこ」

松坂「了解です。5時までやってるあそこですね」

和田「じゃあ、後ほど」

和田、去る。

松坂「何か、この店史上最高に疲れた」

柴田「私も最高に疲れた」

松坂「ここまで強烈なの見れたのはラッキーだったな」

柴田「うん。よーくわかった」

松坂「間に合いそうか？締め切り」

柴田「うーん。と言うより、経験不足だわ、私」

松坂「今更認めたか」

柴田「世の中の男と女はこんなにも隠し事したり、傷ついたり、守ったり、色々あるのに

私には何にも無いんだなーって」

松坂「お前は小説家になりたいたいってことしか考えてないもんな」

柴田「今日見てて思ったんだけど、やっぱり自分が体験したことじゃないと

描けないわ」

松坂「じゃあどうすんだよ」

柴田「だから私、恋愛しようと思う。今から」

松坂「今から！？間に合わねえだろ、締め切りまでに」

柴田「そこなんだよねえ…」

松坂「俺でよければ…」

柴田の携帯が鳴る

柴田「あ、もしもし…」

松坂「…」

暗転。

日付変わって、12月31日

松坂、柴田が入ってくる。

柴田「もう、全然お客さん来ないじゃん！」

松坂「知らねえよ」

柴田「このままじゃ、超地味なカウントダウンになっちゃうよ？」

松坂「だから知らねえって」

柴田「もう店閉めて、帰ろうよ」

松坂「帰ったってどうせ一人だろ。：腹減ったな。餅焼くけど食う？」

柴田「食うよ！」

松坂「何個？」

柴田「八個だよ！」

松坂「多くね？」

柴田「末広がりだよ！」

松坂「何そんなにカリカリしてんの？」

柴田「だって、あの編集の野郎。私の作品のこと全然わかってくれないだもん」

松坂「そりゃわかんないだろうよ。大人の恋愛小説って言ってるのに何超ハードなポーズ

ラブ書いちゃってんだよ」

柴田「だって結局あの時、和田ちゃんしか残らなかつたんだもん…」

松坂「あのゲイのお兄ちゃんの体験談、超克明に描いちゃったもんな」

柴田「でもさ、和田ちゃんと和田ちゃんの友達には大絶賛だったけどね」

松坂「…(ため息)」

柴田「あと何分？」

松坂「(時計見て)後2分くらい？」

柴田「あと2分…とりあえず大殺界を死なずに超えられそうだね」

松坂「だな。でも、マジ今年最悪だったな」

松坂「確かに」

松坂「柴田」

柴田「何？」

松坂「よく頑張ったな」

松坂、柴田をぎゅつとしようとす。

逃げる柴田。

柴田「ちよつと！ちよつと！！何だよ気持ち悪い！」

松坂「あ、ごめん。お前のごと女に見えてきてた…」

柴田「しっかりしろ」

松坂「ああ」

柴田「餅、早く焼いて」

松坂「あ、忘れてた。今焼く」

松坂、餅の準備に入る。

松坂「柴田、餅8個も無かったわ」

柴田「えー」

松坂「悪い、我慢できなくて昨日食っちゃったんだ」

柴田「なにやってんだよもう！買って来いよ！」

松坂「そんなに怒ることないだろ」

柴田「怒るよ！」

松坂「そんなだからいつまでたつても恋愛できねえんだよ」

柴田「餅と恋愛は関係無いだろうが！…うわ！」

松坂「何だよ？」

柴田「くつちやべつてるうちに、12時過ぎた」

松坂「え？あ、本当だ」

柴田「あーもう、ぬるーつと。終わったね」

松坂「そうだな。でも、とりあえず抜けたな」

柴田「うん。松坂、新年いえー（ハイタッチ）」

松坂「いえー新年ー（ハイタッチ）」

柴田「いえー（ハイタッチ）」

柴田「占いなんてしよーもない女が信じるものだと思つてたけど、意外といいね。

大殺界つて、意外と便利だったし」

松坂「？」

柴田「嫌なこと全部大殺界のせいに来たし」

松坂「かもな」

柴田「あ、そんでね、私調べたんだけど、大殺界の次は、『種子』だつて」

松坂「しゅしゅ？種つてこと？」

柴田「そう。撒いてみようよ、種」

松坂「種ねえ…」

柴田「今年は何かあつても、後々何か良いことに繋がる種子だつて思っていればいいんですよ」

松坂「ほほう」

柴田「楽勝だね、人生」

テンション高めの和田がドアから顔をのぞかせる。

和田「ハッピーニューイヤー！」

柴田「うわ、ビックリした。ハッピーニューイヤー！」

松坂「あ、どうもこんばんは」

和田「やつてるの？」

松坂「やつてますよ」

和田「看板、クローズになつてるよ？」

松坂「え！」

柴田「あ、忘れてた」

松坂「しーーーーばーーーーたーーーー」

和田「柴田ちゃん、ドジだねえ」

柴田「すみません」

和田「じゃあ、今から6人、いける？」

松坂「もちろん！ご覧の通りガラガラですから」

和田「じゃあちよつと呼んでくる」

松坂「ありがとうございます！」

和田、去る。

柴田「ちよつと！これ、来たんじゃないの？？いきなり満席だよ！」

松坂「来たな！よっしゃ準備するか！」

柴田「あああああ！」

松坂「何だよ、うるせえなあ」

柴田「超いい」と思いついた」

松坂「なに？」

柴田「私、BLの小説家になればいいんだ！」

松坂「え？」

柴田「なんで気づかなかつたんだ！そうだよね、和田ちゃんも和田ちゃんの友達も

絶賛してくれたんだもん。向いてると思う！」

松坂「おう、頑張れ柴田」

柴田「おう！」

松坂「俺も撒くわ、種。いつ芽が出るかわかんないけど、気長に待つわ」

柴田「おう」

松坂「今年もよろしく」

柴田「こちらこそ、よろしく」

和田「来たよー！」

最悪だった人たちが楽しそうに雑談しながら店内に入ってくる。

松坂・柴田「いらっしやいませー！」

暗転

おしまい